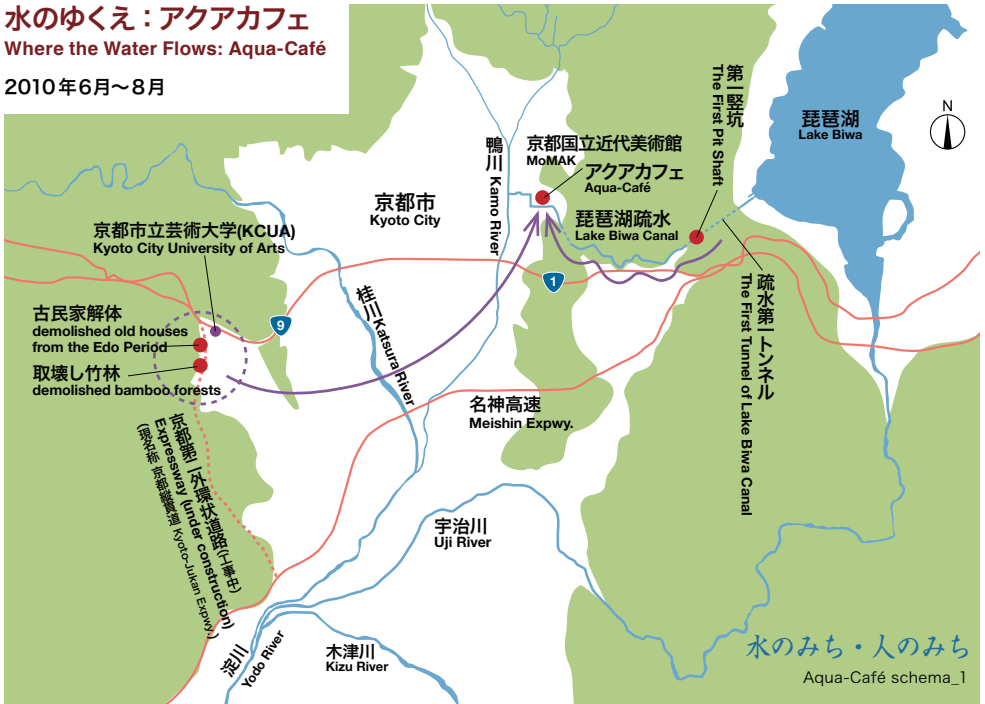


水のゆくえ：アクアカフェ

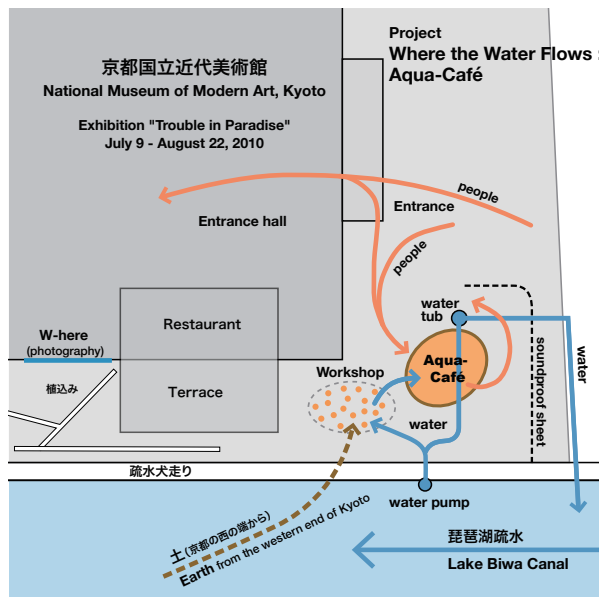
Where the Water Flows: Aqua-Café

2010年6月～8月



京都芸大創立130年記念事業協賛として、2010年夏、京都国立近代美術館で開催された「Trouble in Paradise / 生存のエシックス」展(7月9日～8月22日)において、「水のゆくえプロジェクト」の一環として、大枝の土と琵琶湖疏水の水で「アクアカフェ」を制作した。

同じ2010年に琵琶湖疏水も120周年を迎えた。都市としての京都の近代を、水と交通という2つのインフラ次元から捉え直すことをコンセプトとして、2010年春に高速道路建設のために取り壊された京都の西の端・大枝の江戸時代の古民家の土約12トンと竹数十本を美術館に運び、疏水の水と練り合わせて、水を飲むための空間をワーク・イン・プロGRESSで構築した。形態上のモデルとしたのは、それなしでは琵琶湖疏水建設が不可能だった第一堅坑であった。完成後は、人と水の関係をとらえ直すさまざまなワークショップのプラットフォームとし、展覧会終了後は、本体を丁寧に分解して、すべての土を持ち帰り、再利用を図った。



Aqua-Café schema_2



第一竖坑。大津と山科を結ぶ小関越え沿いにあるが、一般公開されていない。琵琶湖疏水第1トンネルのフィールドワークにて (2010/2/19)

第一竖坑

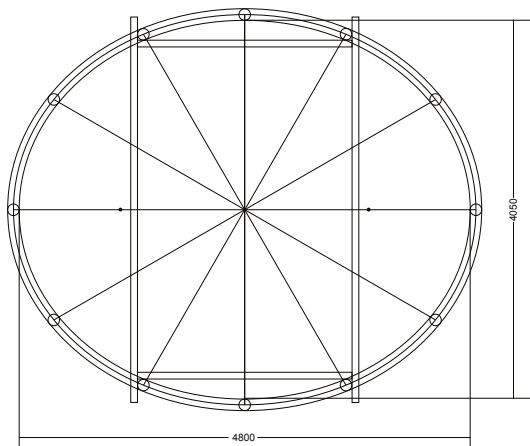
1885(明治18)年8月6日に着工した琵琶湖疏水工事の起点である。設計者の田邊朔郎は、当時日本最長の2436mの第1トンネルを掘るために、トンネル軸上に垂直に穴を掘り、そこから両方向に掘り進める日本初のシャフト方式を採用した。

現在のような重機のない時代に、深さ約47mの竖穴を人力で掘る。それは、疏水工事で最多の犠牲者を出した難工事だった。だがこの第一竖坑がなければ、第一トンネル開通は不可能であり、したがって琵琶湖疏水も、それによる京都の近代化もなかっただろう。第一竖坑は、多くの命と引き換えに、近代都市・京都を生み出した「垂直の産道」なのである。

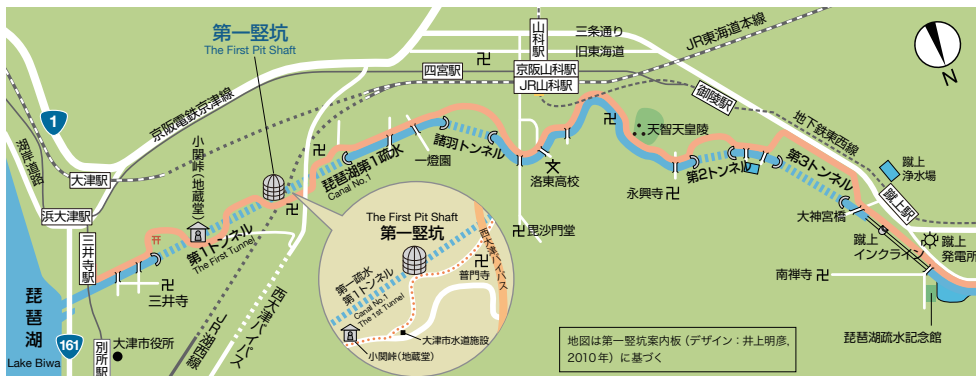
琵琶湖疏水の開通は、辺鄙な地にすぎなかった岡崎を、京都近代化のシンボリック・ゾーンに変えた。第一疏水を模したアクアカフェは、近代都市以前の原野をめざす垂直の孔として、美術館の前にうがたれる。



琵琶湖疏水第1トンネル内より、第一竖坑を見上げる。Rをつけた煉瓦の手積みが見え、ゆらぎのある曲面を形づくっている。撮影 2010/2/19



アクアカフェ平面図:楕円形のプランは、田邊朔郎「第一竖坑図面」に基づき、竖坑断面(3.2 x 2.7m)の1.5倍に設定した。ただし採った竹を使うので、設計図通りにはいかない。



地図は第一竖坑案内板(デザイン:井上明彦、2010年)に基づく

素材の移送と循環 | 土・竹・藁・水

アクアカフェでも、制作と同等に、制作に先立つ素材の入手・運搬・加工、完成後の維持管理、解体に伴う素材の循環・再利用が重視される。

使う素材は、土・竹・藁・水である。

土・竹・藁は、つちのいえでの実践とネットワークで入手済み、また入手可能であったが、問題は水であった。

6月末に約12トンの土(土嚢約500袋)と竹数十本を大枝から京都国立近代美術館に運ぶ。

美術展の搬入扱いなので、運送は日通美術に委ねたが、トラック運転手から、「美術品を運ぶ車でこんなに土を運ぶのは初めてだ」と言われた。

「動く土」こそ、アクアカフェ・プロジェクトの中核にある。



竹は、道路建設で壊される大原野の竹林から一人て数十本切り出し、京都芸大に運んで割った。

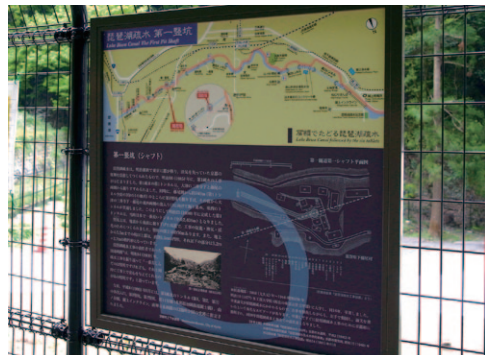


水 水の入手と使い方は、土・竹・ワラと並んで重要だったが、コンセプト上、美術館の水道水を使うことは問題外であった。

明治期の琵琶湖疏水建設の際、河田小龍や田村宗立など芸術家に関わっており、芸術が社会のインフラを可視化することの意義と可能性について、疏水事務所の岡本繁樹所長(当時)と話し合った。開設120周年にも関わらず、琵琶湖疏水は特別なアピールもされていなかった。そこで、疏水の三つのトンネル出入口の扁額と第一竖坑の案内板をデザインすることを引き受けた。と同時に、ほとんど忘れられた第一竖坑をアクアカフェによって可視化するために、美術館横の琵琶湖疏水から直接水を引くことを快諾いただいた。



美術館横の琵琶湖疏水から直接水をポンプアップする。



デザインした第一竖坑案内板。現地の柵に取り付けた状態。



美術館前にピケ足場を組む吉井忠信さんと吉井工務店スタッフ



使用する土を救出した大藪家解体現場とつなげるため、吉井工務店から大藪家解体の際に使われていた防音シートをお借りし、基礎工事期間中、美術館前の制作現場に張りめぐらせた。吉井さんは頑丈なピケ足場を組んで協力下さった。逆さ文字の「夢中です。」の前の言葉「未来に」は見えないようにした。(7/8～8/3)

現場制作

7月1日 現場制作開始

部材加工もすべて現場で行うが、美術館前庭の床面に格子状の目地があり、竹を3mに切りそろえるメジャーになる。規格材でできた方眼状の人工空間は、そのまま加工作業に役立つ工房になった。

一方、基礎は打てないので、石貼りの地面に敷いたシートの上に、割竹を二重に胴巻きにして竹の柱12本を立てる。だが太さも厚みも異なる竹柱は、前後左右ばらばらに傾く。予備の角材を組み、ワイヤーを張って、なんとか形を保った。

科研「土による環境造形」の共同研究者でもある長谷川直人さんが、この日から最後まで制作を手伝ってくださった。基本制作は、長谷川先生と井上の二人で進めた。



7月7日 外側から竹小舞を付け始める。



7月9日 屋根にアーチをつけると建物のシルエットが見えてくる。竹カゴ状で軽いので、強風で数メートルも動いたことがあった。





竹の活用

屋根は、割り竹を二重に重ね、端を竹柱の上端に挿し込んで、シェル構造をつくる。アーチの曲率は、楕円の長軸4.8mに対して、トラックで運べる竹の最長の長さ6mから自然に得られるカーブから導いた。結果的にアクアカフェ全体の高さは約4.4mになった。壁は外側と内側に小舞を施す二重竹小舞。一度の土塗りで柱の見えない分厚い曲面壁ができる。施工が短期間のため、土落ち防止の方法を、シュロ縄を巻くことから、割った竹の残りを小舞に差しこんで緻密にすることに変わった。土同様、竹もまたゴミを出さず、すべてを使い切ることができた。

7月30日 土塗り開始

江戸時代の土塀の土、大原野の藁、琵琶湖疏水の水を現場で混ぜて練る。古い土には藁の繊維成分が溶け込み、とても粘り気が強かった。

竹小舞は密に編み、左官ゴテは使わず、アフリカ風にて塗り込んでいった。構造的な部分以外の作業は比較的単純なため、意欲があれば誰でも参加可能とした。

左：二ームから観光で京都に来た建築家が飛び入り。
右：子どもたちも多く参加した。



一般の造形活動が不可避的にゴミを出すのと対照的に、なまの自然土を素材とする造形活動はゴミを出さない。落ちた土もまわりの埃や汚れと一緒に吸収して、アクアカフェはでき上っていく。

それは驚異であった。



屋根づくり

まず柱間を三等分して平行に竹でアーチをつくり、細竹を加えて交点を縄で結びつけてシェル構造を強化した。

その上をラス網で覆って土を塗る。身を乗り出して土塗りをするため、竹の間隔は人の身体が入れるようにし、ラス網も土塗りと平行して順に張っていく。



土を塗る小学生のあまねちゃん



土を放り上げて手伝ってくれるイギリス人青年

土は団子にして手で放り上げていくのが効率的である。

受け取った土は、素手で塗りのぼす。そのため土の練りは緩めにする。

屋根に塗った土の総量は土囊 40 数袋、1トン近くに達した。

同じ『生存のエシックス』展参加者の彫刻家・中ハシクシゲ先生にも土塗りを手伝っていただいた。



炎天下で屋根に土を塗っていたとき、上半身は屋根の上に、下半身は屋根から下にあった。
土が塗り広がっていくと、屋根の下に安心できる空間が広がっていく。屋根の上には人間には制御できない天空が広がっている。
屋根は人間的空間の上限だという根本的事実を、身体で悟る瞬間があった。



内側から見える土の生物的なテクスチャ

屋根づくりは、8月10日から16日まで7日間を要した。脇を流れる疏水が酷暑を抑えてくれた。

制作期間中、美術館前庭はオープンな作業場と化し、学生に加え、左官、大工、美術家、子供たちから国内外の旅行者まで、世代、職業、国籍も越えてさまざまな人が参加し、多様なコミュニケーションが生まれた。展覧会という限定された場ではなく、さまざまな機会に公共空間を作業場化することはもっと試みられてもよいと思った。



施工終了後、外側の床の養生シートを切り離して路面を洗い、内部の床にはパラスを敷き詰めた。

8月17日 通水

疏水から引き込んだ水は、半割りにした竹6mを2本つないだ水路を流れ、アカカフェを貫通し、美術館前庭の表面を水浸しにして、再び疏水に還っていく。

この循環の仕組みは、アカカフェの成り立ちと構造を示すためにも、不可欠であった。





カフェには2ヶ所のじり口を設けた。入口の看板の「本日のメニュー」欄には、洗濯や水鏡、水遊び、虹づくりなど、水を活かすさまざまなパフォーマンスのメニューを記した。

"AQUA"と"@KCUA"を掛けるのは、2005年に行った「アクアプロジェクト」に始まる。



アクアカフェの内外を雨水から引き込んだ水が循環する。岡崎の別荘庭園群を手がけた七代目植治の手法と同じである。



土を練っていると、寛永通宝が出てきた。江戸時代に大多数の土塀をつくったときに紛れ込んだと思われる。明治以降の近代的価値体系を見直すプロジェクトにふさわしく思え、カフェの空間の中心にぶら下げた。



屋根にはたくさんの小さな穴が自然と塗り残された。穴は作業の息吹をとどめ、小さな光のしずくを暗い室内にこぼす。太陽の運行は、そのしずくをゆっくり移動させた。



空間を斜めに横断する竹筒には、疏水の水がたえまなく流れ、微かな水音と涼気をつくりだす。

来場者は、無償で災害用備蓄飲料水「疏水物語」を陶磁器専攻の学生がつくった「水の器」で飲むことができる。

■アクアカフェ制作日程

基本構造	6/30～7/30
内壁	7/30～8/4
外壁	8/5～12
屋根	8/10～16
カフェオープン	8/18～22
解体・撤収	8/23～9/1



前田剛志氏（アーティスト、「生存のエシックス」展参加メンバー）を席主とした茶会（8月22日）

■会期中イベント

7月30日：藤森照信氏講演会「建築における土」

8月8日：中村哲氏講演会「アフガニスタンでの医療活動、用水路建設、難民救済、農業支援の26年」

8月9日：河原町分流通幹線のシールド工法による下水道工事現場見学会



京都市立近代美術館長・岩城見一氏（当時）と共に。



水を活かすパフォーマンス・メニューの一つ「洗濯」。「洗う」行為を物と場所の浄化・再生と捉え、美術館前庭をモノを洗い干す場に変えた。



アクアカフェには、方位に注意しつつ6つの円窓を開けた。そこから差しこむ光は6つの円をつくる。それらは時刻に応じて色と位置を変える。12個の円光を持つ内部空間は、うつろう光の器でもあった。

解体と撤収

8/24 - 9/1

展覧会終了後は、解体プロセスを「展示」した。解体は、材料調達や制作・展示と同等の価値を持つ。アキアカフェは、それ自体がいわゆる「作品」ではなく、土の再生・循環の一プロセスにほかならないからだ。

材料を再利用するため、解体を制作の逆プロセスとしてとらえ、構造の分解と材料の分離を注意深く行った。作業は5日間で終え、9月1日にはすべての材料を芸大に持ち帰り、敷地を洗浄して元通りにした。

素材とかたち——アリストテレス的にいえば、質料(hyle)は、形相(eidos)と結びついてしかじかのかたちをもつ現実態(energeia)となる。

壊れるのはつねに質料と結びついた形相であって、かたちなき質料そのものは壊れない。

解体とはかたちを壊すことだが、それは逆に言えば、人間が与えた形相から質料を解放し、再び多様な形相と結びつきうる可能態(dynamis)に戻すことなのだ。なまの土はこのことを最もよく示す原-素材である。

存在と世界を、形相の側、かたちを与える人間の側からではなく、質料の側から見る。それは、われわれの文明を支配する人間中心主義を脱して、自然と物質の側から芸術と文明を見つめ、万物を生々流転する潜勢態の相において見ることにつながるだろう。



Where the water flows : Aqua-Café

Aqua-Café was one of the 12 art projects in the exhibition “Trouble in Paradise/ Medi(t)ation of Survival” which was organized in 2010 by The National Museum of Modern Art, Kyoto (MoMAK)*, in connection with the 130th anniversary of KCUA (Kyoto City University of Arts).

In the same year 2010, Lake Biwa Canal, running just beside MoMAK, reached its 120th anniversary. As the first large public engineering work in Japan, it was built in order to reconstruct Kyoto, which had declined after the Meiji Restoration. The canal generated electric power, ways of transporting goods, rice, charcoal or wood, and changed the eastern provincial area into a cultural park. Now, at the western end of the City of Kyoto, Oe area where KCUA is located, the construction of the freeway has destroyed many traditional houses and bamboo forests.

To reconsider the modernity of Kyoto from the viewpoint of water, which support our life and society, Aqua-Café was built by mixing the water from the canal and 12 tones of earth from Oe area with bamboos to create a temporary space for drinking water in front of MoMAK.

The ellipse plan came from the First Pit Shaft of Lake Biwa Canal, which was built by manual excavation to a depth of about 47 meters 125 years ago for making the first tunnel of the Canal. Many workers died from the hard labor of digging the Shaft.

In Aqua-Café project, being independent of the market economy and getting materials without purchasing them were so much important as making the art work itself. Today, in art as well as in architecture, we use materials bought at the market. All those materials are industrial products. As Marcel Duchamp said, all the art works in the modern capitalist society are “ready-made” consisting of industrial products.

Against this current trends, our approach consists of :

- 1_using natural material in principle, such as earth, bamboo, straw and water,
- 2_getting materials directly from the regional environment without purchasing them,
- 3_reusing the materials after removal for another work or project.

This project would not have been realized without new



MoMAK (designed by Fumihiko Maki) and Aqua-Café

relationships among various domains in the society, for example, local residents, carpenters, traditional plasterers, construction companies and Kyoto City Waterworks Bureau. In other words, Aqua-Café was a trial to create an alternative configuration of values and conditions of artistic activity, including materials and techniques.

After the exhibition, the body is decomposed and the materials of earth and bamboos are brought back and reused.

This project also refers to the reconsideration of the relationship between material and form. According to Aristotle, *hyle* (material or matter) is a potential and passive element which comes into being as *energeia* (actual thing) with a given *eidós* (form). But *hyle* remains constant throughout the process of change. It is *dunamis* (potentiality) inherent to everything.

We destroy the form of an actual thing, for example, the form of Aqua-Café, but not the material. In other words, through destruction, *hyle* is liberated from the *eidós* (form) forced by human beings and turns back to the state of *dunamis*.

We human beings tend to see the world from the viewpoint of the form which we pressed upon the material. This is dualism of creation and destruction, which is connected with anthropocentrism. But if we see the world from the viewpoint of *hyle* (material or matter), all things are *dunamis* (potential beings) in the state of flux without end.

Aqua-Café is neither an “art work” nor an “end”, but simply is a temporary form or a network of relations which the primary material (*hyle*)—earth and water—takes in the process of constant change.

* <https://www.momak.go.jp/English/exhibitionArchive/2010/381.html>